

【正誤表】

『2018年 第36回学術大会 プログラムおよび講演抄録集』にて、掲載内容に誤りがございました。
関係各位にご迷惑をおかけしましたことを謹んでお詫び申し上げます、ここに訂正いたします。

特定非営利活動法人 日本顎咬合学会 学術委員会

<訂正箇所>

117頁（左上段）O-45 年齢に応じた限界運動と機能運動を考慮した咬合再構成 演者写真

9日 15:10～15:30 G 604

O-45

⑦咬合・咀嚼 ⑨クラウン・ブリッジ

年齢に応じた限界運動と機能運動を考慮した 咬合再構成

Occlusal reconstruction considering border movement
and functional movement in accordance with age



宮田 匡人 Masato Miyata
医療法人 宮田歯科医院

【症例の概要】 歯科医院へは数十年振りの来院であり、口腔内は多数のう蝕や欠損を生じていた。顎顔面形態が mesiofacial pattern で比較的顎位が安定しやすく、力のリスクが高くはない。そのため、下顎前歯叢生が軽度にあったが、患者の要望を受け入れ、咬合調整のみで治療を行った咬合再構成の症例である。

【経過・考察】 治療前は咬合高径が下がり、下顎位が後方に押し込まれていたが、治療後咬合挙上が起こり、適切な位置に移動することで咀嚼運動終末位と習慣性閉閉口運動の終末位の一致が得られ、限界運動と機能運動の回復を行うことができたと考ええる。

【結論】 咬合再構成を行う際に、なぜ現在に至ったかを推測しリスク判断をした上で治療に介入することが重要であり、限界運動と咀嚼運動の回復にも有効であると考ええる。